



2016 全日本 ARDF 競技大会開催される

平成 28 年 10 月 1 日・2 日 新潟県新発田市

平成 28 年 10 月 1 日(土)・2 日(日)、新潟県新発田市において「2016 全日本 ARDF 競技大会」が開催されました。平成元年から始まった全日本大会(当時は全国 FOX テーリング大会)も今大会で 28 回目となり、信越地方としては平成 22 年の長野県富士見町に続く 6 年ぶり 4 回目、新潟県としては平成 13 年の黒川村(現胎内市)に続く 15 年ぶり 2 回目の開催となりました。

新潟県での開催が決定した平成 27 年秋より開催エリア選定・現地調査等を進めてきましたが、最も気を配ったのは「コンパクトな大会運営」でした。

アマチュア無線人口の減少から、大会開催についての負担感を感じる声が年々増えてきています。今後も各地で安心して全日本大会を続けていけるよう、新潟の大会開催ノウハウを結集して次年度以降の参考となる大会運営を工夫しました。大会として必要なことを押さえたいうでで簡略化できることはできるだけ省き、少人数でも準備・運営できる大会を目指しました。

とはいえ 100 名以上の参加選手が集う国内最高峰の大会ですので、競技大会としてのクオリティーの維持は絶対条件です。そのため信越地方本部・新潟県支部を中心に多くの方々に協力をいただきました。特に開催地の地域クラブである JARL 新発田クラブ (JA0YOK) のメン

バー各局にはお世話になりました。

近年の全日本大会では、144MHz 帯競技と 3.5MHz 帯競技を土・日の 2 日間で開催するパターン (開催順は毎年交代) が定着していて、それによると今大会は初日が 144MHz 帯競技・2 日目が 3.5MHz 帯競技となるはずでした。

今回の全日本大会では初めての試みとして「スプリント競技」を取り入れることとしました。これは数年前に国際ルールで規定された新しい部門で、まだ JARL としては正式競技としてルール化されていません。

しかし世界大会では正式に取り入れられ、昨年日本で開催された Region3 大会(群馬県渋川市)でも行われたことで国内でも興味が高まっていました。そこで思い切って全日本大会で取り入れてみることにしました。

ただし JARL の正式ルールが定められていない事情からエキシビジョン大会としての開催となりました。

開催地である新発田市は、新潟県下越地方(県北部)に位置し、海岸地域から山岳地帯といったバラエティに富んだ自然を有する地域です。天気予報では大会日はずっと悪天候だったのですが、3 日前から急に予報が動き始め、当日は雨どころか暑い日差しが照りつけるほどの気持ちよい秋晴れの大会となりました。





■10月1日 スプリント競技(エキシビジョン大会)

最も苦心したのは機材とルールでした。群馬県の協力を得てスプリント用TXを自作し、ルールについてはこの数年の国際大会を参考としてまとめました。とはいえ初めての試みですので不安もあり、5月の新潟県大会と7月の全国高等学校大会で予行的な意味も含めて2度の大会を開きました。

それにより機材・ルール・運営方法等々いろいろな問題点を洗い出すことができ、より良い大会とすることができました。

スプリント競技とは、従来のARDF競技(国際的には「クラシック競技」と呼ばれるようになりました)と違い、1km四方程度の狭いエリアにTXを2セット(第1ループ・第2ループ)を設置し、12秒毎に切り替わる信号を探索していくというスピーディな競技です。最も難しいのは、同時にさまざまなことを考えなければならないということで、継続的な集中力を必要とします。さらに常にダッシュで走り続けるという過酷さも加わり、競技後半ではベテラン勢でも初歩的なミスを連発してしまうという難しい競技です。

開会式では大会副会長の種村一郎 ARDF 委員長(JG2GFX)の挨拶に始まり、来賓の有坂芳雄 JARD 会長(JA1HQG)からも選手に激励のお言葉をいただきました。選手は総勢90名(うちジュニアが38名ですべてJARL会員)で、各々に工夫をこらした受信機を手にスタートして行きました。

競技エリアは海岸沿いにある「紫雲寺記念公園」で、砂丘地帯に広がる公園全域を使いました。第1ループは起伏のある遊歩道を中心としたエリア、第2ループは防風林のあるフラットなエリアというように、前半と後半



で違った雰囲気での設定となりました。

新しい競技に戸惑いながらも選手はエリアを縦横無尽に駆けぬけ、次々とフィニッシュしていきました。

■10月2日 144MHz 帯競技(本大会)

前日の大会を上回る115名(うちジュニアが45名ですべてJARL会員)の参加選手となりました。受付後はスタート地点へバスで移動し、そこで開会式がおこなわれました。

大会会長の高尾義則 JARL 会長(JG1KTC)・大会実行委員長の高橋哲也信越地方本部長(JF0JYR)の挨拶に始まり、昨年優勝の関東地方本部からのJAIA杯(地方本部対抗)カップの返還、地元の新発田市から参加したM60クラスの齋藤俊治選手(JA0BET)による選手宣誓と続けました。

競技は日本四大アヤマ園の一つに数えられる「五十公野公園」を中心としたエリアで開催されました。ここは細かい起伏の連なる大規模な運動公園で、陸上競技場や野球場などの施設も有しています。選手はそこから1キロほど離れた田園地帯にある小学校をスタートして行きました。選手はスタート直後の公園に入る前の平野部で、どれだけ正確にTXを探索できるかということが成績を左右しました。

公園内に入り込んでから測向すると144MHz帯電波特有の反射・回折によって惑わされてしまうからです。また曲がりくねった林道も選手の方向感覚を狂わせる大きな要因となったようです。体力だけではなく知力も必要となる設定の結果です。

とはいえさすが全国から集まった精鋭選手だけに、優勝タイムはこちらの想定を大きく上回る素晴らしい成績となりました。





大会本部となった公園内の「サンワークしばた」には大会の特別記念局「8NØARDF」が設置されました。

7月1日から運用開始した局も最終日を迎え、競技を終えた選手たちからも運用していただきました。

ジュニアによる特別記念局の運用があったことは嬉しい限りです。

大会当日は地元テレビ局による大会取材も入り、体験取材とでも言うのでしょうか？女性アナウンサーが特別選手として競技に参加しました。

スタッフのサポートはあったものの、初めて受信機を操作して競技エリアを走っていただきました。

またスタート前・フィニッシュ後には多くの選手へのインタビューもあり、後日地元の情報番組で大会の様子が広く紹介されました。

競技終了後はICチップを使ったSIシステムの導入により、素早い集計と迅速な結果発表ができました。

表彰式では JARD 杯として有坂芳雄 JARD 会長 (JAIHQG) より中学・高校の各優勝校にトロフィーを、各クラスの入賞者には高尾義則 JARL 会長 (JG1KTC) はじめ、種村一郎 ARDF 委員長 (JG2GFX) ・高橋哲也 信越地方本部長 (JFØJYR) ・金子豊新潟県支部長 (JHØBQV) よりメダル・表彰状・副賞が贈呈され、フラッシュと拍手で讃えられました。

最後に丸山正審判長 (JAØHWC) ・中村満裁定長 (JAØRHG) による大会講評がありました。



そして次年度の開催予定地である徳島県への引き継ぎ式として、金子新潟県支部長より吉田徳島県支部長 (JA5NC) へ全日本大会のシンボルと大会横断幕が手渡され、大会の全日程を終了しました。

会期中両日とも大きなトラブル・怪我等もなく、大会が無事終了できたことを、参加者の皆様、大会関係者、そして地元競技開催地の住民の皆様深く感謝申し上げます。

なお競技成績等の詳細は大会特設サイト (下記) に掲載してあります。ご覧ください。

[▽2016 全日本 ARDF 競技大会特設サイト](http://2016all-japan.rdf.jp/)

<http://2016all-japan.rdf.jp/>

レポート：2016 全日本 ARDF 競技大会実行委員会 JFØFDT 佐藤 久



